

別冊 I メイト便り第 16 号

I メイト 交流の愉しみ

ーアジ風に乗って I メイト交流はひろがるー

特集：Covid-19（新型コロナウイルス）感想文
元 I メイト 学生の寄稿文より

NPO 法人 アジアの新しい風

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414
TEL/FAX 03-5426-6714 <http://www.npo-asia.org>

2020 年 9 月 12 日 発行

まえがき

OB・OG事務局担当理事 上 高子

2月1日に新春交流会を開いてから、Covid-19のせいで、リアルの活動が一切できなくなりました。以後Zoomというインターネット上の面談を通じてコミュニケーションの仕方を試行錯誤していますが、実はアジ風は設立以来事務局のオフィスがそれぞれの役員の自宅でパソコンを使っているテレワークであること、Iメイト交流の中核はEメールであることなど、世間の水準に比べてリモートコミュニケーションが進んでいたことに、あらためて気づきました。

われわれがこの危機的状況においてもひるまず、「草の根の相互理解」という活動理念を追求しているという証しを、会員のみなさんに知ってもらいたいと、急遽この「別冊Iメイト便り」を発行することに決めました。投稿者10名のうち大半は日本在住でアジ風会員として活動に加わっています。それこそアジ風の多様性を示すものと、大変心強く思います。

8月初旬に下記のメールをOB・OGに送信しました。それに応じて寄せられた投稿をみなさんへお届けします。

この半年は世界中が新型コロナウイルスに振り回されました。この闘いはまだ続きそうです。みなさんは今どんなことを考えながら日々の生活を送っていますか？

私が感じていることは、「人類は運命共同体」であるということです。たとえ先進国でウイルスを一時的に収束しても、途上国の惨状は続きます。そしてウイルスはいずれ先進国にも回りまわって戻ってくるのです。そのような状況下で世界は今、「自国ファースト」の風が吹き荒れていますが、「自分の国だけがよければいい」という考え方はまったく間違っています。自己利益の追求は、結局は、自分の首をしめることになるのです。こんなときこそ、人類は連帯して手を結ばなければなりません。

アジ風のIメイト交流で、ある会員から次のような学生の逆転の発想メールが紹介されました。「果たしてコロナウイルスは本当にウイルスなのでしょうか。もし地球が生物だとしたら、長い歴史に破滅の道を刻んだ好き勝手な人間の方がウイルスで、それにストップをかける自然災害やコロナウイルスは白血球みたいなものだと思います」。

私たち日本人はもとより、他のアジアの国々も明らかに欧米の世界を一つの目標としてきましたが、これでいいのだろうか、という疑問が湧いてきます。アジアの価値のひとつ「自然との共生」をもっと大事にしていくべきではないでしょうか。そして国と国の争いは、力の強い国が相手を服従させるのではなく、もっと国際機関が力を持ち、話し合いで調整し解決する、という方向に向かうべきではないでしょうか。アフターコロナには、そんな世界が実現することを強く希望します。

私たちアジ風会員は、みなさんの若い新鮮な考えに触れて、自己啓発を続けたいと願っています。どうぞアジ風の「多文化共生（異なる文化が対等に共生すること）」の草の根運動を応援してください。どうぞ、新しい日常（New Normal）を守って健康に留意してください。

2020年 盛夏

アジアの新しい風 理事 上 高子

目 次

1. オンライン日本語学習でコロナ禍を乗り越えた
ドゥアンケーオ・スットプラータナー タイ・タマサート大学出身
2. なぜアジアで感染者が少ないか
崔振宇 中国・北京第二外国語大学出身
3. 視点を変えてポジティブに一読書の時間が増えた
チャン・トウ・チャン ベトナム・貿易大→京都大学出身
4. 見える不幸の中で見えない宝を探す
ジャン・ミャオ 中国・清華大院出身
5. コロナ禍で思ったこと
王隼淇 中国・清華大学出身
6. 周りのことを考えられる余裕ある人間に
仲村クスマー タイ・タマサート大学出身
7. 2年ぶりの帰国が延期されて
ドウ・アイン・トゥ ベトナム・貿易大学出身
8. コロナ感染拡大が日本語学校へ与えた影響
チャン・マイ・フォン ベトナム・貿易大学出身
9. 母は医療関係者、一人ひとりが自己認識と連帯を！
ブンガ ラトナ ムティアラ インドネシア・UNPAD4年生
10. 人が人であるために大事なこと
アズカ アズキア インドネシア・UNPAD3年生

オンライン日本語学習でコロナ禍を乗り越えた



ドゥアンケーオ・スットプラターナー
(ニックネーム・リボン)

琉球大学博士修了→日本企業勤務

チュラロンコーン大学研究員

→マヒドン大学教員

2020年3月よりタイ政府は、コロナ感染拡大に対して緊急対応策を実施している。New normal, Social distancing, Self-quarantine など新しい言葉が次々に発信されている。私の日常生活も完全に真逆になってしまった。物理的職場ではなくオンラインで会議をすること、カフェではなくオンライン注文で配達してもらうこと、公園で運動ではなく小さい部屋の中で軽いエクササイズをすること、チェンマイの実家へも公共交通手段で往復できない。感染拡大予防ができる方法は「自粛」とタイ政府が主張したため、無理矢理やるしかなかった。3か月ほどオンラインで家族、友達、同僚と連絡し、小さな部屋での生活を続け、つらくても我慢した。

もちろん、その中でも悪いことばかりではなく楽しい時間もできた。まず、自分に向かって自分のために Reskill・Upskill を行う。独りぼっちの部屋で徹底的に日本語など学ぼう、と決意した。元 I メイトの森郁子さんに週1回から2~3回でオンライン授業を頼んでいる。森さんは新聞記事を切り取り、写真を撮って、勉強教材として送ってくださる。ご家族も時間調整などの協力をしてくださり、おかげで日本語の表現、漢字はもちろん日本社会の状況・実態も把握できている。そして、7月よりマヒドン大学の日本語教師になる結果につながった。コロナが生んだ思いがけない自粛生活をこんなふうに有効活用でき、とてもうれしく思っている。

結んだ信頼関係と前向きな姿勢はどんな苦しい状況でも救いになるということを実感しているこの頃である。ついでながら、オンラインの存在にも感謝したい。

元 I メイトからのひとこと

人とのつながりを大切にして、どんな時も前向きに人生を歩んでいるリボンさんを素敵だなと思っています。微力ながらいつも応援しています。

(森 郁子)



なぜアジアで感染者が少ないか



崔振宇

神戸大学修士課程→大阪大学博士課程在籍
(天津在住)

新型コロナウイルスは依然として世界中で猛威を振るっています。しかし、被害の規模に関しては、アジア（特に東アジア、東南アジア）はほかの地域とは対照をなしているようです。感染状況を示す指標の一つとして、世界各国の感染率（人口1万人当たり感染者数、2020年8月現在）を見ると、東アジアと東南アジアの国と地域の多くは、下位四分の一にあります。感染症の伝播は各国の政治、経済、社会や文化など、各要素から大きな影響を受け、異なる様相を呈していますが、東アジアと東南アジアで感染規模が小さいことは、恐らく以下と関係があるでしょう。

まず、災害時には、公的情報を信用して、行動することがこれら地域の慣習になっています。東アジアには、地震、台風、洪水といった自然災害が多発します。災害が発生した時には、政府から出した指示に従って行動するという事は当然になっています。それゆえ、今回もこれら国々の国民は、政府の指示をしっかりと聞いて行動しました。ヒト-ヒト感染の感染症は一人一人が行動してはじめて抑制できますので、民衆の公的機関が出した勧告に従う意識が感染拡大を止めることに大きく寄与したと言えるでしょう。

さらに、文化も一因といえるでしょう。東アジアと東南アジア諸国は集団主義的であるといわれ、集団あつての個人と考えられ、調和と安定、身分と階層観念が重視される傾向があります。したがって、謙遜で、他人との協調が求められます。それに対して、欧米では個人主義が唱えられ、人々は自分に対して責任を持つべきと考えられます。また、個人の自由と権利が重要で、干渉されるべきではないと考える人が多いようです。集団主義と個人主義とどちらがいいかという絶対的な答えはありませんが、伝染病という特殊な事件に面するとき、ある程度自らの権利を放棄し、出された指示に従って、他人にも責任を持つ行動をとったほうが、抑制に効果的だと考えられます。

また、伝染病に対する重視度があるでしょう。前に鳥インフルや新型肺炎など経験してきたので、感染が他国で広がるときには、アジア諸国は他人事として見るのではなく、自らも同じような問題にあったらどうするかと対策を迅速に考えることができたでしょう。しかも、自国の状況にふさわしい対策を取りました。今回、ウイルスが最初に拡散した時、新しいウイルスで未知なことが多いにもかかわらず、アジア以外の多くの国が十分重視しなかったことも感染拡大に繋がったでしょう。

もちろん、感染状況に影響を与える要素は、政策決定過程、医療体制が整っているか、医療従事者と物資が十分あるか、高齢化率、家庭生活様式、国民健康意識、他国との間における人口流動規模など、まだまだたくさんあります。どの点がどれほど感染状況に影響するかをはっきりさせるには、データを利用した研究が必要です。

伝染病は一つの国のみの問題ではなく、全人類にとって共通の敵になっています。国際社会はこれら地球規模の災害に直面するとき、相互の間にある当面の葛藤を棚上げし、紛争を中止し、一致団結して、その共通の敵に向き合うべきでしょう。こういう時こそ、互いに情報、経験を共有しあって、科学技術面で協力することで、困難を乗り越えなければなりません。また、今回の経験を通じて、いろいろな文化がある中、互いにゼロサム関係にあると見ずに、尊重しながら、良いところを学び合い、共にグローバル化社会で共存し、発展していくべきだと痛感しています。

編集部註

崔さんはアジ風発足以来の I メイト学生。その間 2 人の I メイト会員が退会しましたが、OB として事務局とつながってくれている貴重な存在です。なぜアジアの感染者が少ないか、という疑問に対してこのような分析を寄せてくれました。感謝です。

視点を変えてポジティブに ― 読書の時間が増えた



チャン・トウ・チャン

貿易大学→京都大学→日本企業勤務

(正会員)

今年の 1 月ごろ、仕事関係で感染症に関するセミナーに出席しました。そこで、感染症が世界中に広がるスピードの情報に驚きました。なんと 24 時間だそうです。例えば、日本からもっとも遠いところというのは地球の裏にあるブラジルのリオデジャネイロですが、日本からリオまでのフライト（乗り継ぎ時間も含め）はだいたい 24 時間です。ある国・地域に感染症が発生し、その感染症をもつ人の移動スピードを考えますと、24 時間で地球の裏まで広がってしまいます。そのため、自分の地域・自分の国のことだけを考えるだけでは、ダメですね。

その話を聞いたときは、まさか世界中が Covid-19 でこのような状況に陥るなんて悪い夢にも思っていませんでした。Covid-19 にかかっている人々はもちろん、かかっていない人にも今年の生活がいろいろ乱されているでしょう。例えば、留学生が留学できなくなり、オンライン授業で対応すると言っても、問題が全て解決されるわけではありません。実際留学費の全額も払っているのに、その国の生活を経験することができなくなり、留学先との時差で生活に支障が起きる場合もありますね。また、進学プラン・キャリアプランが実施できなくなったり、外出自粛で他人との接触がなくなったりし続けると、Covid-19 にかかる前に、精神の病気にか

かってしまう人も多く出そうです。私自身も今年仕事で海外赴任の予定でしたが、covid-19の影響で赴任がキャンセルされてしまいました。さすがにデジタル時代だと言って、在宅勤務でもなんとか仕事が続けられています。以前の face to face コミュニケーションの価値や意味を改めて実感しました。人間はやはりバーチャルより、物理的に同じ空間でのコミュニケーションの方を好むと思います。

この困難な状況を仕方なく受け入れている人も多いと思いますが、視点を変えて、何か新しいことを生み出せないかと考えてみたらどうでしょう。こんな時こそ、ポジティブなアイデアや情報が欲しいです。例えば、私の場合外出自粛や在宅勤務で通勤時間がなくなったので、本を読む・聴く (audio book) 時間が増えました。以前から知人に勧められ読みかけていた “The Drug Hunters” という本を、この間ようやく audio book で聞き終えました。科学博士・新薬研究者である Donald R. Kirsch と Ogi Ogas によって書かれたものです。そこには、新薬を開発するのに何が 필요한のが、なぜ一錠のお薬を出すのに長年もかかるか、実際過去にあった様々な話が書かれていて、よく理解できました。新薬の研究・開発は自動車のような理論的エンジニアリング過程ではなく、ディズニーの作品をつくる過程に似ていると言われています。科学や技術だけではなく、クリエイティブさや運もなくてはならないそうです。こうして、今まで人類は過去には難病だったものを、たくさん治療に成功しました。きっと今回の新型コロナウイルスももうすぐ過去の難病になるだろう、とこの本を読んで思いました。

この苦境を乗り越えるために、個人個人が、毎日1つずつポジティブなことを見つけて始めてみるのは大事だと思います。また、この投稿のように積極的に情報交換すれば、社会との繋がりが感じられますね。世界中の人が心身ともに健康に過ごし、この災難を早く乗り越えるように祈っております。

元Iメイトからひとこと

チャンさんとマッチングしてはや10年。この間の彼女の成長ぶりは目を見張るほどです。加齢で衰えるばかりの私は、「彼女に何をしてあげられるのだろう」と自問するこの頃です。

(上 高子)



アマビエ 西垣大介さん作
丹波新聞提供

見える不幸の中で見えない宝を探す



ジャン・ミャオ

東京大学・博士修了・研究員

(学生会員)

令和2年1月15日に日本で一番目の新型コロナウイルス患者が確認されてから、もう7か月が経過しました。この間、誰もが新型コロナウイルスが及ぼした影響を実感し、日本だけではなく世界の人々も別の生活様式に入ることを余儀なくされました。しかし最初は不便としか感じなかった新しい生活様式にも、慣れるとともに意外と良いところもあることが分かってきました。

新型コロナウイルスの影響で、みんなの生活がスローダウンしました。人々は以前より多くの自由時間を得て、生活にゆとりを感じることができているようです。長い間、私たちは非常に速いスピードで生活してきて、家族と話すことや、読みたい本を読むことや、料理をすることなどは、ともすれば贅沢なことでした。毎日一心不乱に勉強や仕事をする中で、何が一番重要なのか考える時間が少なかったのです。今回の災いは、私たちが心を落ち着けて生活の意義を見直す時間を与えてくれたと思います。それによって新型コロナが終わってから、もっと良い生活にすることができると思います。

一方、今回の新型コロナを通じて、国と国、人と人との助け合いを実感しました。コロナが中国で始まった当初、中国は日本から多くの支援を受けていました。その後、日本でコロナが発生した時、中国も自発的に日本に援助を提供しました。現在、感染拡散を防ぐために、世界各国はほぼ半閉鎖状態です。これは交流と経済の発展にも大きな影響を与えました。各国にはそれぞれの利益と方針がありますが、共通の危機の時にみんなが同じ目標に向かって、同じことを一緒に頑張っているのは、やはり暖かいと感じます。

何事にも両面性があります。ただ、私たちが常に積極的に、楽観的な態度で困難に直面し、目に見える不幸の中で目に見えない宝を探ることができることを望んでいます。新型コロナウイルスが早く落ち着いて、一日でも早く私たちが正常な生活に戻ることを切に願います。

元Iメイトからひとこと

新型コロナという災いをも前向きにとらえるミャオさんの姿勢に敬服。東大の博士号を取得し9月から研究員となるミャオさんは、今後とも果敢に物事に挑戦していくと思います。大いに期待しています。

(富平 茂)

コロナ禍で思ったこと



王隽淇

一橋大学修士課程2年生

アジ風第三回奨学生（学生会員）

私はコロナのおかげで、「人にそれぞれ好みの生き方がある」ことをより深く認識できました。自分はもともと家に引きこもることが好きで、緊急事態であろうがなかろうが、私の生活ペースにあまり影響がありませんでした。そのため、最初は、世界中で強制的に外出を規制し、早い段階で事態を抑えるべきだと思っていました。でも、周りの人々を見ると、外出できないから自分の仕事や趣味ができなくて困っている人が結構いることがわかりました。なので、強制規制を反対する人の立場を少しはわかるようになってきました。私個人としては、目の前の「自由」を少し犠牲し、早いうちに以前の「自由」の状態に戻るのが一番望ましいと思っていました。

ある学生がメールで言及した「人間のほうがウイルスではないか」という考え方について、確かにその考え方は一理あると思います。私もこのように思っていた時期がありました。しかし、もし私たちが本当に「ウイルス」になって、同じ考えをしたら、「私たち人間がウイルスの存在で、生物としての地球の生存する権力を奪うのではないか。」というようになって、ロジックが無限に循環してしまうと思います。

個人の考えですが、私たちは人間として生きていく権利があります。地球上の他の生き物もそうです。もし、自分の生存はウイルスの生存と矛盾するようになったら、自分が生きていくために、ある程度他の生き物（例えばウイルス）と競争しなければなりません。人間は他の生き物と共存できなくなったら、他の生き物の生存環境を破壊しない限り、競争するのは当然だと思っております。人間が地球で出現したことも、将来破滅する可能性も、自然の法則に従っていると思っています。ですから、自分が人間としてこの世界に存在する限り、ちゃんと命を楽しんで、もし自分が人間としての存在は地球を傷つけたと思ったら、出来るだけ環境に優しいことをして、申し訳ないと思った分を埋めればよいと思います。

自分が個人として他の人との関係もそうですが、ある文化団体（例えば国）のメンバーとして他の文化を持つ人々との関係も、人間として他の生き物との関係も、まずは自分の存在や要望をちゃんと理解した上で、他の文化や生き物の存在や要求を認めることが可能になります。簡単にいうと、まずは自分の存在を認めて、次に他文化、他種族を尊重していくべきだと思います。

元Iメイトからひとこと

コロナ禍の体験が世の中の多様性を知り、他者とのつきあい方を考える機会になったようです。この経験が決してマイナスばかりでなかったことに安堵しました。（奥山 正昭）

周りのことを考えられる余裕ある人間に



仲村クスマー（旧姓タイニコン）
琉球大学修士課程修了→日経企業業務
アジ風第一回奨学生（賛助会員）

2020 年のお正月に今年の目標を立てました。今年はどんな一年にしたいか考え、それに 向けてやりたいこともたくさんありました。2 月になると新型コロナウイルスに関する ニュースが流れるようになって、仕事先の従業員にも感染者が出たときには意外と危険性 があるかもしれないと感じ始めました。それが 3 月になると、仕事はコロナウイルスの 対策として在宅勤務に切り替わりました。その頃は平日ずっと家で仕事をするし、週末に 気晴らしに出掛けようとしても営業するお店もなかったので、数カ月の間ずっと家の中にいて退屈でした。その後は必要な買い物があってもコロナの影響で開いていないお店や、開いていても営業時間が短縮され、開いているスーパーに入っても食品や日常の消耗品も 品切ればかりでした。また、コロナの影響で夫が失業したり、義父が沖縄で経営している居酒屋も休業する状況が続いたりなど周囲で様々なコロナの影響が出始め、そうすると家を出られなくて退屈するどころか、感染してなくても不安は募るばかりでした。

コロナの影響は世界中で経済や健康に直接関わるような影響を与えました。さらに間接的な影響まで考えるとその影響は計り知れません。例えばタイの場合、国内でマスクが非常に不足しているのに政府が海外に寄付してしまったことや、緊急事態宣言を出すタイミングなどに国民が不満や疑問を持ち始めました。以前から国民の中に政府に対する疑問などはあったと思いますが、コロナがきっかけとなり政府反対運動など様々なことに繋がって大きな影響を与えました。私は何が事実で何が正解なのか分からないので、はっきりと決める事は難しいです。喧嘩ではなく、異なる意見を持っている方々の話も聞きながら平和的に皆で社会のあり方を探していきたいと思います。まだ変化の途中ですが、タイの未来は明るいほうに進んでいって欲しいと思います。 タイの事だけではなく、世界中でウイルスを無くそうと努力している人、広めようとしている人、自分に関係ないと無関心な人々など、多様な考えを持った人々がいると改めて実感することが出来ました。

これらを通して今回のことで色々分かったことがあります。私たちは大きい社会の中のたった小さな人間の一人一人ですが、世界中で今起きていることから勉強して、自由を保ちながら社会に迷惑をかけない行動すること、まずはそれを守りたいと思います。私は周りの事も考えられる余裕のある人間になりたいと考えています。今回は自然災害と違って、人と人の間で感染して広まる恐ろしい現象ですが、人の間で起きていることなので、ある程度管理することや抑えることが出来るのではないかなと思います。しかしそれには皆の努力が必要です。国民の力なしでは国のトップだけが努力しても乗り越えられないし、経済のことも考えないといけないうし、何が正解か本当に分かりません。なので政策が成功している国や、失敗して国民に怒

られる政府も出てくると思います。しかしそれも成功や失敗と言えるかどうか難しいです。本当に何が正解か分からないからです。またどの答えを選んでもいいという人と悪いという人が必ず出てきます。なるべく真ん中をとって前述したように自由を保ちながら周りに迷惑をかけない、それだけでもだいぶ社会の力になると思います。

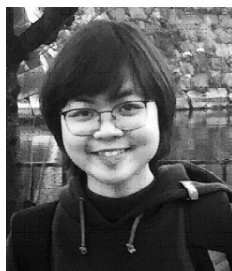
コロナはもちろん起きない方が良かったですが、コロナがあったから人間が勉強になり、社会の様々な面を整理する機会を貰えていると考えることも出来ます。コロナで起こった出来事は辛いけれど、それをただの辛いことにしないで、これをきっかけに社会を見直して皆が住みやすい社会を作ればいいなと思います。

元 I メイトからのひとこと

素晴らしい内容で感心しました。特に「コロナで起こった出来事は辛いけれど、これをきっかけに社会を見直して皆が住みやすい社会を作ればいいなと思います」というところ。コロナ禍の中しんどいでしょうが、ご主人と力を合わせて乗り切ってください。

(城谷 健一)

2年ぶりの帰国が延期されて



ドウ・アイン・トゥ

神戸大学修士課程修了

アジ風第四回奨学生（学生会員）

生まれたときから現在まで 2020 年の新型コロナウイルス感染症のようなパンデミックを目撃したのは初めてではありません。昔の「SARS」と「MERS」の 2 つの残酷なパンデミックの時、私はまだ純粋な小学生でした。病気についての情報が耳にしたことがあります、あまり気にしませんでした。COVID-19 は違います。この感染症が発生した時からピーク時や第 1 波の落ち着いた時まで毎日情報をちゃんと取得しました。第 1 波が収まったニュースに対して非常に喜びました。生活が普通に戻ったら、航空会社も通常営業に戻って留学で 2 年間離れている家族と再会できる日が遠くないと思いました。

しかし、希望はすべてコロナの第 2 波に殺されました。コロナは全部を乱しています。この見えなく聞こえなく言えなく危ない敵は一体何から進化されたか、なぜ 2020 年にして人間をアタックしているかななどの疑問がありました。

1918-1920 年に世界を攻撃したスペイン風邪は世界中で 5 億人、当時の世界人口の 4 分の 1 の生命に影響を与えて、2 年間がかかってやっと収まりました。COVID-19 が何年後消える

か分かりません。早ければ早いほどいいなと願っています。

前世紀と比べ、今日の医療技術がはるかに発展しているので研究者や医者たちがもうすぐコロナをやっつけると確信しています。成功日までももちろん犠牲がいろいろありますが、大事なのは自分の意志や態度だと思います。一人一人がしっかり認識して正しい行動をするのは大成功につながります。コロナと戦うフロンティアである医療関係者を応援してください。自然災害と同じ、この先ウイルスと共存することを避けられないことから、人間はこれからの生き方を見直したほうがいいと思います。

元 I メイトからひとこと

コロナのため、楽しみにしていたご両親の来日が叶わず、さぞ残念だったと思います。
帰国までの限られた期間で、思い出に残るようなことができればいいのですが・・・。

(曾我部 健)

コロナ感染拡大が日本語学校へ与えた影響



チャン・マイ・フォン

日本語学校（在東京）教員・事務職

コロナ感染拡大は、我々の生活の色々な面に悪影響を与えています。人は仕事がなくなったり、子供たちが学校に行けなくなったり、どこへ行っても感染を心配したりしていて、人類は様々な問題に向き合っています。日本語学校で働いている私はその影響をすべて感じています。

私は、ベトナムのハノイ貿易大学を卒業して EPA 事業担当の日本語学校に勤め、介護福祉士候補者・看護師候補者に 4 年間日本語を教えました。

去年夏に、本校へ転勤となり、家族と来日しました。EPA 関係の仕事の続けながら、ベトナム人留学生対象の仕事も一部担当しています。去年は仕事が非常にスムーズでしたが、今年は、コロナの影響により色々変わってきて、苦勞と感ずることが多かったです。

まず、4 月に入学する留学生が来日できなくなりました。現地で勉強して待機してもらえないのです。留学の夢を抱き、日本へ行ける日を首長く待っていた学生たちは、あまりに苦しくてがっかりする気持ちを表しました。学生が来られないせいで、スタッフや講師の私たちももちろん例年通りの仕事なくなり、休校や待機又は在宅勤務の日々が始まりました。今度学生たちのモチベーションをどうやってアップできるのか、日本語の勉強をどうやってサポートできるのか、問題になります。例えば、いつ入国できるかとよく質問されますが、実は分か

りませんが、「分からない」と答えられません。前向きの答え方を考える必要があります。同じく学生対応のことですが、顔を合わせずに言葉だけで相手に気持ちよく理解してもらうのがどんなに難しいのか、よく分かるようになりました。

また、在籍中の学生もコロナ感染拡大により色々な影響を受けています。アルバイトができないのは当たり前のことになり、生活費で悩んでいた学生が少なくなかったです。それより、一番大変なのは勉強が学校でできなくなったことです。うちで勉強することになりました。もちろん自分で勉強できる人もいるし、全然できていない人もいます。

今度、Zoom や Line などのソフトは大きな役割を果たしました。オンライン授業やオンラインカウンセリングがどんどん始まりました。これを機に教育の実施方法がガラッと変わり、オンライン教育が当たり前の働き方になってきました。日本語教育に力を入れている人々の視線が大きく変化してきました。直面ではなくても学生に知識を伝え、学生の様子をオンラインでも確認できることについて、色々な工夫をしなくてははいけません。これから、オンラインという傾向が、どんなに世界に影響を与えていくのか、非常に楽しみにしています。

緊急事態宣言が解除されてから、何か月も経ちましたが、感染拡大がまだ続いているので、学校は前のようにまだ戻っていません。現在の様子を見ると、気持ちが本当に複雑です。これからの多くの変化があるかもしれませんが、緊急事態宣言の時のように、どうしても戻りたくないと思うています。

I メイトからのひとこと

日本の学校でコロナ禍に遭遇した状況や苦勞している学生のこと、またベトナムで留学志望しながら足止めを食っている学生への思いやりが大変よくわかり、オンライン教育についても前向きの考え方が伝わってきました。I メイト交流を始めた頃あのチャンさんが、今は指導者の立場でしっかりと日本語教育に関わっておられることを、改めて力強く思います。

(小田 晋作)

母は医療関係者、一人ひとりが自己認識と連帯を！



ブンガ ラトナ ムティアラ

パジャジャラン大学 2020 年 8 月卒業

まだまだコロナウイルスは依然としてすべての国を悩ませている問題です。学生生活も最後なのに、全然大学に行けなくてとても悲しいです。卒論も、みんなが自分の家からオンラインで発表しましたが、大学で友達とお祝いできなかったので寂しかったです。また 8 月の卒業式

もオンラインで行われましたが、私は参加しませんでした。次の卒業式はコロナの感染者が少なくなって、私の卒業式が大学で行われますように。この新しい日常では、新しい規制により、スーパー、デパート、レストランの営業時間が短縮され、夕方に閉店する必要があります。訪問者はまた、Physical Distancing のために制限されています。みんながマスクをしなればなりません。UNPAD では来年まで授業をオンラインでやる予定です。

現在の状況も社会に経済的な影響を与えています。今年の卒業生は就職することは非常に困難です。従業員を減らす会社がいくつかあるからです。私はとりあえず求職中で、オンラインで行われる研修やセミナーに参加しています。

インドネシアでも、「コロナウイルスは本当にありますか？」との疑問が話題になっています。そのような疑問に反論する人がいます。しかし、私にとって、それは問題ではありません。ますます多くの人々が感染し、病院は患者で一杯であり、死者さえでており、これは市民が一緒に直面しなければならない大きな問題です。

私の母親は健康アナリストをしており、病院の厳しい状態で彼女は働き続けなければなりません。彼女は患者と直接接触しているので、私は彼女について非常に心配しています。このウイルスがなくなったと感じているすべての人は非常に利己的ではありませんか？距離を置かずに自由に群がり、マスクを着用していません。たぶん、この状態にうんざりしている人もいますが、連帯と自己認識は、感染を減らす強力な武器です。少しぐらいなら大丈夫だろうという気のゆるみが、大切な家族や友人、職場の方を感染させてしまうかもしれません。一人ひとりがよく考えて行動しましょう。

現 I メイトからひとこと

ブンガさんは堺市の ASEAN 交流事業で来日経験もあり、日本理解を深めてくれています。コロナ禍で保留になっている日本留学の実現のためにも、コロナの早期収束を祈りたい。

(奥山 正昭)

人が人であるために大事なこと



アズカ アズキア
パジャジャラン大学 4 年生
(現 I メイト学生)

新型コロナウイルスの伝染が発生してからもう半年以上になり、不安に満ち溢れる時期を超え新しい生活、新しい日々のなかで世界がまたまわり始めました。思い返せばこの 2020 年は

自分も信じられないほどハプニングばかりでした。2019年に発生したウイルスの伝染は遠い国の話だと思ってあんまり気にしなかった、それがいつの間にかグローバルな危機になってしまいました。「果たしてコロナウイルスは本当にウイルスなんでしょうか。もし地球が生物だとしたら、長い歴史に破滅の道を刻んだ好き勝手な人間の方がウイルスで、それにストップをかける自然災害やコロナウイルスは白血球みたいなものだと思います」と、I メイトからのメールに返信したことがあります。

インドネシアにも伝染が広がり、学校もオンライン授業になったし、人が集まれそうなイベントは全部中止されて、ここにもしばらくアイソレーションがつづくでしょう。伝染にはもちろん心配していますが、この後の経済はどうなるのかわからなくてそれともかなり問題になると思います。

しかし、私にとって一番怖いのはウイルスではなく、人です。パニックでマスクや Hand Sanitizer を買った人がたくさんいて、本当に必要とするひとがそれらを買えなくなっていました。それだけではなく、インドネシアに伝染が広がって以来、SNS でよく中国人をせめる人をみました。この伝染を中国人のせいにして SNS でアップしたことで憎しみがウイルスより強く広がると大変なことになるでしょう。気持ちはわかりますが、やはり人間は自分のエゴを優先するものとおもいました。

慣れていない生活の中で苦労するのは当然ですが、ソーシャルディスタンスのおかげで気づいたこともあります。いままで嫌だった朝の登校、当たり前だった平凡な毎日、友達に会って喋ったり笑ったりして、死ぬほど疲れる部活のレッスンもそれらがどれだけ充実で尊い時間だったのか今さら分かった気がしました。今になって過ぎ去ったあの日々をもっと全力で楽しんだ方がいいなと思いましたが仕方ありません、今できることはただ感染対策マニュアル通り新たな生活を生きるしかありません。

ところですが、生憎インドネシアではコロナウイルスの流行がどんどん増える一方でなかなか治まる様子がないみたいです。私の町にはあまり事件がないのは幸いなことなのですが、安心のせいかマスクをつけず、ソーシャルディスタンスをしない人をときどき町中に見かけます。正直、不安です、どうやらここではこの状況に対して無関心な人がまだいます。

誰がために距離を取ったのか、誰がためにマスクをつけているのか、それは自分のためではなく周りの人を守るためです。いくら人と遠ざかっていても思いやりの心を忘れてはいけません、それを心がけることさえ出来たら、無関心な人たちも感染対策の実行はどれだけの重大なことかわかるはずです。離れていたこの時でこそ失いかけた人が人であるための大事なこと、思いやりの心を築くべきです、そうすれば遠い記憶になってしまった何気ないあの日々に戻ることは夢ではないと私は信じています。

現 I メイトからひとこと

アズキアくんのエネルギーは文章の端々にほとぼしり、かつ、必ず最後には人の幸せを願う優しさが溢れます。アジ風活動はもちろんのこと、どの分野においても大器になれる学生と、見守る楽しさと喜びを得ました。 (原谷 洋美)

編集部註

「まえがき」にアンダーラインで紹介された逆転の発想を紹介した学生です。

編集後記

広報担当理事 奥山 寿子

「後世の歴史家は『コロナ前―コロナ後』と一線を画すかもしれない」とさまざまなメディアによる論評が見られます。それほどまでに人類史上に大きな痕跡を残すであろう Covid-19（新型コロナウイルス）のパンデミックについて、アジアの新しい風の元 I メイト学生達と一人の現役 I メイト学生が、自分たちの思いを寄せてくれました。

今年の初めに新型コロナウイルスが出現した、というニュースが出てきた時点で、こんな惨状になるとは誰が予想したでしょう。あれから 8 か月、世界のほぼすべての国が Covid-19 の脅威にさらされています。緊急事態宣言で否応なく自宅にいと、感染症の専門家が毎日メディアに登場し、さまざまな観点から解説をしているので、私たちは誰もがコロナ評論家になれるのではないかと思うほど、この感染症について詳しくなりました。世界各地からのニュースもコロナ一色となり、人類がおなじ惨禍に向き合っているという実感を持ちます。

今回、感想を寄せてくれたのは、これからの長い人生が待っている若者たちです。すでに人生の大部分を過ごしてきた熟年世代の多くの会員とは違い、ウイルスと共存しなければいけない彼らの生活と先々を見据えた生の声です。

コロナがもたらした社会の変化に戸惑う人、健康への不安、コロナと人間との関わり方を考えた人、コロナ禍で失ったもの、得られたものもあります。各国間の人の移動が禁止されていても、国境を越えて情報や技術を共有し、協力し合うことの重要性を説いている人もいます。会社でも大学でも IT を活用してテレワークやオンラインが活用され、新しい経済活動が定着する一方で、Face to face の重要性も見直しています。各国の対応の違いを分析し、その国の事情を理解しようとしている人もいます。国情の違い、立場の違いがあるにせよ、ここに出てくる若者の誰もが前向きに、この事態を受け入れ、立ち向かおうとしていることに私は心を打たれました。

このような若者が私たちのすぐ側にいることを心強く思い、彼らがこれからのアジ風を支えてくれるのではないかと密かに期待をかけています。

かれらの日本語表現を応援してくださった元 I メイト会員の皆さんに深くお礼を申し上げます。また、読者のみなさん。この小冊子の感想と励ましを事務局にお寄せいただけましたら幸いです。

一日も早いコロナ収束を願って。

2020年9月吉日